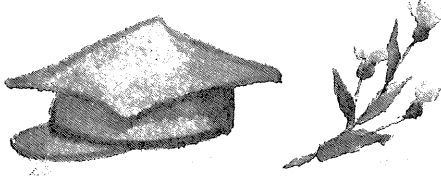


白線浪人の発生



名古屋大学教育学部教授
佐々木 享

前回まで、旧学制のもとでは高等学校の卒業者は原則として無試験・無選抜で帝国大学に進学できたと書いてきた。帝国大学発足以来原則はその通りであったし、実際にも、1920年代初めくらいまでは、高校を卒業したのに帝大・官立大に入れなかった者はまれであった。ところが1920年代後半になると、高校を卒業したのに帝大・官立大に入学できなかった者——白線浪人が急激に増加し始め、関係者の頭痛の種となってきた。

歴史を古い方から順次に叙述していくと現代に近い方が切り捨てられてしまうおそれもあるので、今回はこの白線浪人問題をとりあげてみる。

戦前の受験浪人

浪人ということばは、がんらいは浮浪人を意味し、徳川時代になって、主家を去り禄を離れた武士をさすことばとして用いられた。近代では、「比喩的に、①定職を離れ、次の勤め先を持たないでいる者、②上級学校への進学や就職の意志がありながら、それができずにいる者」をさす（『岩波国語辞典』）。

昭和初年——1920年代後半——以後には、当時の学校制度の構造に見合って2種類の受験浪

人が存在した。以下ではたんに浪人という。

第1は、中学校・実業学校を卒業して、高校・大学予科・専門学校等を受験したが入学できずに、次の受験の機会を待って勉強している者である。1919年以後高校高等科・大学予科は中学校4年修了で受験できたが、これに落ちた者のなかには5年に進まずに中退して予備校に行くなど次年度以降の再受験をめざす者つまり浪人となる者も少しはあったが、大部分は中退せずに5年に進むのがふつうだった。中学校5年を卒業しないと、専門学校など他の学校を受験できなかったからである。あくまでも高校進学をめざす者にとっては中学校5年は浪人第1年目のようなものだったが、これを浪人とはいわなかったようである。

学校により試験日がずれており、1人の受験生が複数の学校を受験できたので、高校・専門学校をめざす浪人の実数は把握されていない。全校の試験日を統一していた官立高校受験者についてみれば、1919（大正8）年には総受験者17,983名中過年度卒業者は5,166名（28.7%）、1925（大正14）年には総受験者25,277名中過年度卒業者（4修で浪人した者）1,258名をふくむは7,701名（30.5%）であった。この間に官立高校は、12校から25校に倍増していたが受験者も

増加し、浪人受験者もふえていったのである（大正8年及び大正14年の『高等学校高等科入学者選抜試験ニ関スル諸調査』による）。これ以後は官立高校は増設されなかったから、高校入学問題はますます激化して行くこととなる。

受験浪人の第2は、高校を卒業したのに帝大・官立大に入学できずに、次年度以降に再受験しようとしている者たちである。旧制高校生の制帽に白のテープが捲きつけられていたところから、高校を出て浪人している者を白線浪人と称するようになった。

このほか、戦前には尋常小学校から中学校に進む入試競争も激烈であった。しかし、中学校入試に落ちた者の多くは高等小学校に進み、高等小学校1年修了さらには2年修了の段階で再度受験するのが普通であった。中学校進学という目標からみれば実質的に浪人同様の者がいたにしても、高等小学校は大部分の児童にとっては受験予備校ではなかったし、また高等小学校1年あるいは2年修了でないと受験できない実業学校、師範学校のような学校もあったから、高等小学校を受験浪人のたまり場のようにみることはできなかった。

旧制大学の入学者選抜のしくみ

白線浪人発生のメカニズムを調べるために、まず旧制大学の入学者選抜のしくみを簡単に整理しておこう。

1919（大正8）年に全面改正された高等学校令により、高等学校には従来の大学予科に替わった高等科がおかれ、高等科は文科・理科に分けられた。文科・理科それぞれは、教育課程上の主体となる語学により、甲（英語）、乙（ドイツ語）、丙（フランス語）の3類に細分されていた。文科・理科とも甲類・乙類はすべての高校

に開設されたが、文科丙類は一高など数校、理科丙類は東京、大阪の両校にしか開設されなかった。

高校高等科卒業者は、その専攻語学の如何を問わず文科は法・文・経のいわゆる文系学部に、理科は理・工・農・医のいわゆる理系学部に優先的に進学することが認められていた。なお学習院は高等学校ではなかったが、その高等科卒業者は多くの帝大では高校高等科卒と同等に扱われていた。

いっぽう各帝国大学は学部ごとに、受験者の学歴による入学優先順位を定めていた。文系学部は第1位を高校文科卒業生、第2位を高校理科卒業生とし、理系学部は逆に理科卒を第1位に、文科卒を第2位としているのが普通であった。第3位以下及び学士入学、転学部等の順位やらの選抜方法は、大学・学部により異なっていた。北海道帝大の理学部には予科がなかったので他帝大と同じ方式をとったが、同帝大の農、工、医3学部には予科が設けられていたので同予科修了者が第1位とされ、他帝大で第1位・第2位に扱われている者が第2位・第3位に扱われた。

帝大の入学者募集は2回に分けて実施された。第1次募集で優先順位1位の志願者が定員以下の場合、その志願者は無試験・無選抜で全員合格とされた。定員に不足する分については第2次募集が行われた。第2次募集については、1位の者を再び優先する学部といわゆる傍系学校出身者をふくむ2位以下の者と1位の者とを同等に扱う学部とがあった。

第1次募集については、その出願締切期日は1921年以後は2月15日に統一されており、高卒者（現役と浪人）だけに「出願が認められた」。前述のように出願者が定員内であれば全員合格と

されたが、出願者が定員を超えた場合には、東京帝大医学部医学科のように5科目の学力検査を実施したところもあったが、普通は語学をふくむ1～3科目程度の学力試験による競争試験を実施した。文系学部では、超過数が僅かな場合には選抜を行わない場合があった。たとえば京都帝大法学部では、1928年には定員350名の1.53倍にあたる538名の出願者があったが、この年には無選抜で全員を入学させた。文学部、理学部、工学部のように学科が細分されている学部では、選抜は学科ごとに行うのが普通であったが、共通試験を実施してその成績と志望によって配分した例もあった。

第2次募集の方式は、学部・学科ごとに定められたが、その出願期日は3月末から4月上旬とするのを例とした。第2次募集ではいわゆる傍系学歴者にも出願が認められるので、志願者が定員を上まわるのが普通で、競争試験による選抜が実施された。

以上に略述したのは帝大の選抜方式である。官立の医科大学は帝大同様の選抜方式を実施した。他方、本連載第2回に述べたように東京工大、大阪工大、両文理大は第1次募集の段階から傍系学歴者（とくに文理大では高等師範出身者）の出願を認めるなど、大学ごとに幾分異なる選抜方式を実施した官立大もあった。しかし、

官立大学も第1次募集の出願締切期日は帝大のそれにほぼ統一されていたので、第1次募集で複数の大学に出願することはできなかった。

白線浪人発生のメカニズム

戦前にあっては、高卒者（現役、浪人とも）はまず帝大・官立大に出願したと思われるので、各年の帝大・官立大の第1次募集の出願者中の過年度卒業生数がいわゆる白線浪人の実数に近いものであったと思われる。この数は、昭和初年の1927（昭和2）年にはすでに909人に達していたが、年々急増して僅か4年後の1931（昭和6）年には2,406名となっていた。2,406名といえば現在の京都大学1校の募集人員（1985年には2,865名）に少し足りない数であるが、同じ1931年の高卒者は5,255名であったから、白線浪人は現役生の約45%に相当したわけである。

昭和初年においても、帝大・官立大の第1学年収容人員は当該年度の高卒者にほぼ匹敵するものであった。たとえば、1927年の官公私立の高卒者総数は4,763名で、同年の全帝大と新潟・岡山・千葉・金沢・長崎の5官立医大の募集人員総数は4,787名で、僅かに募集人員の方が上まわっていた（実際には、このほかに第1次の出願有資格者としては学習院高等科卒業者がかわるが、他方東京商大が約70名の高卒者を入学

表16 高卒者の帝大・官立大への出願者・入学者(1927～1931)

年	高 校 卒 業 者 数	当 年 度 卒 業 者							※ ⑦ (③-④)	不入学 者計⑧ (⑥+⑦)
		一 次 募 集			二 次 募 集					
		出願者 ①	入学者 ②	不入学 者③ (①-②)	出願者 ④	入学者 ⑤	不入学 者⑥ (④-⑤)			
1927(S.2)	4763	4725	3385	1340	744	431	313	596	909	
1928(S.3)	5033	5066	3512	1554	600	314	286	954	1240	
1929(S.4)	5156	5170	3336	1834	653	365	288	1181	1469	
1930(S.5)	5285	5302	3459	1843	501	339	162	1342	1504	
1931(S.6)	5255	5258	3327	1931	443	287	156	1488	1642	

※⑦は一次の不入学者中で二次に出願しなかった者。

させていた)。こうした状況のもとで白線浪人が発生し増加していったメカニズムを、帝大・官立大の志願者・入学者の統計をもとに調べてみよう。

昭和期に入ると、第1次募集の段階で高卒者が無選抜で入れる大学・学部は次第に少なくなった。1927年に第1次募集で無選抜だったのは、文系では京都帝大の法、文、経の3学部、東北・九州両帝大の法文学部のみ、理系では京都帝大の理、工、農3学部、東北帝大の理、工学部、九州帝大の農学部のみであった。他方、東京帝大の法、経、理、農、工学部、すべての帝大の医学部と全官立医大では第1次募集の段階から激烈な選抜が行われた。理系についてはすべての医学部に、文系については東京帝大に志願者が著しく偏っていたのである。

もう少し詳しく調べてみよう。

まず現役について。

1927年の高卒者は4,763名で、このうち4,725名つまり現役卒業生の99.2%が帝大・官立大の第1次募集に出願した。この出願者は、一部は無試験で、他は競争試験の結果、計2,324名(出願者の72%)が合格し、1,340名が不合格となった。

帝大・官立大の2次募集に出願した者のうちの現役高卒者(表中の④)は744名であった(こ

のなかには、何らかの事情で第1次募集にできなかった38名もふくまれていると思われる)。この④と第1次募集の不合格者1,340名との差596名(表中の⑦)は第2次募集に出願しなかったわけで、その大部分は浪人になったと思われる。医学部では第2次募集がなかったし、公立医大はすべて自己の予科をもっていたから、医学部志望者はこの道を選んだ可能性が大きく、白線浪人が累積していく重要な要素であった。

第2次募集では431名(出願者の57.9%)が合格し、313名(表中の⑥)が不合格となった。以上の結果、現役卒業者のうちから1次に不合格で2次に出願しなかった596名と2次の不合格者313名との合計909名(表中の⑧)の新たな浪人が生まれた。

次に過年度卒業生(浪人)の帰趨について。

この年には969名の浪人が第1次募集に出願し、638名(65.8%)が合格し、331名が不合格となった(表中の⑩)。この年の2次募集出願者中の過年度卒業生(表中の⑫)は187名であった。1次募集で不合格となり2次に出願しなかった者つまり⑩と⑫との差144名(表中の⑮)は、1回受験しただけで再び浪人になったと思われる。

第2次募集に出願した過年度卒業生中108名が合格し、79名(表中の⑭)は不合格となったが、彼らは再び浪人になったと思われる。こ

過年度卒業生								
一 次 募 集			二 次 募 集			※ ⑮ (⑩-⑫)	不入学 者計⑯	不入学 者の合計⑰ (⑧+⑯)
出願者 ⑨	入学者 ⑩	不入学 者⑪ (⑨-⑩)	出願者 ⑫	入学者 ⑬	不入学 者⑭ (⑫-⑬)			
969	638	331	187	108	79	144	223	1132
1426	974	452	193	85	108	259	367	1607
1784	1188	596	208	110	98	388	486	1955
2123	1222	901	292	177	115	809	924	2433
2406	1435	971	239	142	97	732	829	2471

※⑮は一次の不入学者中で二次に出願しなかった者。『高等学校卒業生ノ大学入学ニ関スル調査』により作成。

して、過年度卒業者でこの年再び浪人となった者は⑮と⑭の計（表中の⑯）223名であった。

こうしてこの年には新卒者から生じた新たな浪人（表中の⑧）909名と、既往の浪人で再び浪人となった者（表中の⑯）223名との計（表中の⑰）1,132名の浪人が生じた。対前年比で浪人は163名増加したわけである。これら浪人のほとんどすべては翌1928年の第1次募集出願者中の過年度卒業者数（表中の⑨）となって現れる（前年度の⑰と当年度の⑨の数が一致しない理由は不明）。

以上の結果として、高卒の現役で帝大・官立大に入学した者は1927年の83.8%から1931年の69.6%へと低下した。高校を出れば無選抜で帝

大に進学できるということは、ごく一部の学部だけのことで、大部分の高卒者にとっては夢のような話になってしまったのである。

とくに帝大医学部・官立医大入学の競争は激烈で、もちろん第2次募集はなく、表17にみるように、高卒現役の合格率は1927年の56.6%から31年の38.1%へと低下し、浪人して入学する方が普通になってしまった。

表17 帝大医学部・官立医大の出願者・入学者数（1927～1931）

年	本年度卒業者			過年度卒業者			不入学者計
	出願者	入学者(合格率)	不入学者	出願者	入学者(合格率)	不入学者	
1927	1,135	642 (56.6)	493	291	161 (55.3)	130	623
1928	1,151	554 (48.1)	597	477	239 (50.1)	358	955
1929	1,213	488 (40.2)	725	617	311 (50.4)	306	1,031
1930	1,175	478 (40.7)	697	862	345 (40.0)	517	1,214
1931	1,202	458 (38.1)	744	853	422 (49.5)	411	1,155

出所は表16に同じ。